

227) ひとときの夢

いつの日も女心は 夢のなか愛を求めて
哀しみの解^とけるときまで すぎさりし時^{とき}空^{さまよ}を彷徨う
あたたかき愛のことばに よりそいしあの日あのところ
今はもう風のごとくに すぎてゆくひとときの夢

いつの日も女心は 夢のなか愛にうなされ
寂しさに息をひそめて ひとり寝の涙にくれる
よろこびに心ふるえて 誓^{きのう}いしは昨日のごとくに
つかのまの生^{いのち}命はかなく すぎてゆくひとときの夢

いつの日も女心は 夢のなか愛に包まれ
さわやかな朝の光に 果てしなく心ときめく
ゆく日々を愛^{いと}しき人の 優しさに抱かれながら
はるかなる想い出だけが すぎてゆくひとときの夢

いつの日も女心は 夢のなか愛し合いたい
空白^{とき}の歳^{うづ}月を埋めて どこまでもついて行けたら
人の世の運^{さだめ}命忘れて ひたすらに愛は昂^{たか}まる
満たされぬ女心に すぎてゆくひとときの夢